

造形の遊びを通して自分なりの思いを表し、 仲間とともに遊びをつくりだす幼児の育成

和歌山大学 丁子かおる

新宮市立丹鶴幼稚園 尾崎卓子

新宮市立丹鶴幼稚園 東 柚夏, 大江 優, 甲斐華衣, 松村知江, 塩谷帆夏, 杉本咲江,
潮崎真里奈, 栗山紗菜, 倉本理紗

1. はじめに

新宮市立丹鶴幼稚園は、和歌山県東牟婁地域に唯一ある幼稚園で、3、4、5歳児の3年保育を行っている。近隣の保育所や小学校、中学校の子どもたちと交流やお茶ごっこやなぎなた、ダンスなど地域の先生とも関わりをもって過ごせるようになった。昨年度より全国大会での発表を機に取り組んできた研究を継続することとして、今年度は新宮市教育研究会に向けて、和歌山大学での共同研究を園内研として位置づけ、幼稚園の教職員全員で研究を進め、1～2か月ごとに和歌山大学教員と保育を検討し、継続して研究を行うこととした。ただし、ここでは紙面の都合から、以下に東柚夏先生担任の4歳にし組を中心に報告する。

2. 研究の背景

4月初、進級児9名、新入園児1名の10名でスタートした4歳にし組は、いろいろなことに興味を持ち、自分たちなりに考えることのできる発想豊かなクラスであった。課題としては、失敗することや上手くできないことに敏感で、興味はありつつも挑戦することを諦めてしまう姿が見られた。そこで、子どもたちには様々な素材に触れ、素材そのものの感触を楽しんだり、全身を使って思い切り自分なりの表現を楽しんだりするような経験をしてほしいと思い、上記のテーマを設定した。昨年度は、造形表現・図画工作・美術教育全国大会において「さわって、かんじて、かんがえて、やってみる。豊かな遊びを育むための保育への転換」と題して発表した。本研究では、昨年度の研究を基に、さらに一歩踏み込んだクラスの達成目標に向かっていきたいと考える。造形遊びを通して、一人一人がのびのびと自分の表現を楽しむ中で、友達や保育者に認められ、受け入れられる経験を重ねてつながり合うことで、豊かな心を育ててほしいと考えている。同時に、カリキュラム・マネジメントにも焦点を当て、様々な方法で園内研を行い、保育の質・保育者の資質の向上に取り組んできた。

3. 園の目標

『一人一人が自分の思いを十分に出し、友達との関わりを深め、互いに育ち合う心豊かな子どもの育成』である。そして、目指す子ども像は、以下の3つの姿である。

★自分で行動し意欲的に遊ぶ幼児★自分の思いを表現できる幼児★思いやりのある幼児

4. 実践研究の内容・方法

研究テーマ 「一人一人が自分の表現を楽しみ、つながり合う保育を目指して
～造形遊びを基にしたカリキュラム・マネジメントとしての園内研修～」

研究の方法

- ① 幼児が自分なりに試したり考えたり、意欲的に環境に関わっていきけるための素材研究や教材研究と手立ての改善
- ② 幼児理解と保育に関する評価と改善
- ③ 短期と長期をつなぐ保育計画の改善

研究方法について

- ① 幼児が家庭では触ることがないことや経験できないことに、たくさん触れ、体験し、実際にやってみる、そして、時には友だちと一緒にやってみたり、それを共有したり・・・実体験を日々繰り返し行うことが大切だと考えて取り組んだ。保育者はそのために素材を準備し、子どもたちの発達に応じたものを提供し、振り返った。幼児が満足できるよう、材料は十分準備し、活動の場を保育室だけでなく、園庭にも広げ、人的・物的環境の両面から考え、進めた。
- ② 評価と改善については、活動からエピソード記録やドキュメンテーションなどを作成し、写真や遊びの場面のエピソードから読み取れる幼児の姿を振り返り、話し合い、幼児の育ちや学びを可視化するようにした。
- ③ 保育計画の改善は、大学教員と研修を行う中で、日案、週案など保育計画の改善についての検討をした。その中で、週案は、1週から2週案に変え、その日ごとの幼児の遊びや友だちとの関係、その日の様子などが継続してわかるようにまとめ方を変えていった。その日限りではなく、振り返りを基に進めることにした。

研究方法① 4歳 にじ組の実践研究

幼児が自分なりに試したり考えたり、意欲的に環境に関わっていけるための素材研究や研究と手立ての改善

5月の事例 「忍者屋敷へ行こう！」(絵の具を使い、忍者屋敷までの道のりを描く活動)

環境に合わせてイメージを持ち、絵の具を使って描くことを楽しみ、試行錯誤しながらのびのびと自分なりに表現することをねらい、自由遊びを深めていく。

手立てと幼児の姿

○子どもが自由遊びの中で興味を持っていた「忍者」を題材にしたことで、夢中になって遊ぶ姿が見られた。

○大きな段ボールでつくった衝立や道に見立てた長い模造紙を用意したことで、体に絵の具が付くことも気にせず、塗ったり描いたりしてダイナミックに遊ぶ姿が見られた。

○活動が進む内に“忍者がお城に向かう道のり”というイメージから離れてしまい、ひたすら塗りつぶすことを楽しんでいたり、友達が描いた絵の上から塗ってしまったりする姿も出てきた。

ここ忍者のお城やで！

黒は暗いイメージからかな？



ここに毒あるから踏んだらあかんで



○成果 と ●課題

○色を豊富に用意したことで、好きな色を選んだり描きたいイメージに合わせて色を選んだりすることができ、一人一人がやりたいことを実現できたことで夢中になって遊ぶ姿が見られた。

○準備や片付けを子どもたちと一緒にやったことで、自分たちでつくったという達成感や自信、生活を進めていく意識につながった。

●一人一人のイメージはあったが、遊びを進めるうちに描くことよりも塗ることが楽しくなり、初めに描いていた絵を塗りつぶしてしまった。

●イメージの共有ができていなかったため、友達が描いていたところも上から塗りつぶしてしまう姿が見られた。

●描くスペースも足りていなかった。

6月の事例 「梅雨のおともだち」(絵の具で描く、雨に見立てたたらし絵の活動)

5月の事例での課題を基に、自分なりに描き表現することを楽しむことをねらいとして、梅雨期の生き物や自然を描く活動を行った。

手立てと幼児の姿

- 前回の反省から、子どもたちがイメージを共有しながら取り組めるよう、クイズを用いて丁寧に導入を行うことを心掛けた。
- 筆と、たらし絵で雨が降る様子を表現できるよう、スポイトも用意した。
- 友達の絵を見て、「(カエル)一人じゃかわいそうやから」と隣に描いたり、「雨が上がったから虹出るから、この辺に虹も描こうよ!」と一緒に描いたりする姿が見られた。
- 「このカエル雨が早く降ってほしいから泣きやるんやで」と泣いている表情のカエルを描いたり、渦巻きで「これはお父さんカタツムリ、ちっちゃいのが子どものカタツムリ」とカタツムリの家族を表現したりしていた。



カエルの家族
いっぱい!

中から見たら、
すごい景色...



大雨でーす!
ザー---

○成果 と ●課題

- 一人一人がしっかりとイメージを持ち、自分なりに表現することを楽しむ姿が見られた。
- それぞれがイメージを持って大切に描いていたこともあってか、5月のように塗りつぶしたり、友達の絵の上から描いてしまったりするような姿も見られなかった。
- 大きな紙と一緒に描く活動だったため、友達とのやりとりも見られるのではないかと予想していたが、友達とのやりとりがあまり見られなかった。

7月の事例 「すきな色みーっけ!」(色水遊び)

水遊びが始まり、水に親しんでいたことと、友達とのかかわりから新たな気づきがあればという思いから、色水遊びの活動を行った。

手立てと幼児の姿

- まずは色水づくりを十分に楽しみ、タイミングを見て綿球や障子紙などの染める素材を出すようにした。
- 色水を容器に移し替えて遊びが広がるよう、スポイトやじょうご、さまざまな形や大きさの容器を用意した。
- できた色水を飾る場所に冷蔵庫に見立てた棚を用意し、イメージを広げながら遊ぶことを楽しめるよう環境を設定した。○色の濃さや混色など、こだわってつくり、自分のイメージする色をつくろうと追求する姿が見られた。
- 友達がつくっているものを見て自分も同じ色を選んでみたり、つくり方を取り入れたりしながら自分なりに表現する姿が見られた。



いい色できた!

微妙な調節で綺麗な
グラデーション!

鮮やかな
色が並びます

○成果

○ねらいとしていた、自分なりの色をつくったり試したりしながら色水遊びをすることを楽しむ姿や、友達のしていることに刺激を受けたりして、イメージを広げながら遊ぶことを楽しむ姿が見られた。

10月の事例 「好きな遊び」(ステージごっこ など)

毎日の好きな遊びについて見直したいという思いから、環境図を用いた指導案を作成し、実践した。9月から始まっていた『ステージごっこ』や、そこから派生した売店の商品づくり、楽器づくりなどの遊びができるよう環境を設定した。

手立てと幼児の姿

- 商品づくりのコーナーにはカップやパックなどの容器を用意し、つくりたい商品に合わせて選んだり、容器からイメージが広がったりするようにした。
- 楽器づくりのコーナーには、缶やビン、洗濯板など異なる材質の素材を用意し、実際に叩いて音を確かめながら、楽器づくりに活用できるようにした。
- 予想とは異なり、売店の商品づくりのコーナーに用意していたクレープづくりに人数が集中し、他の遊びをする子どもはあまり見られなかった。

○成果

○クレープづくりでは、一人一人が工夫してクリームをしぼったり、トッピングをしたりする姿や、友達の様子を見たり、会話を楽しんだりしながら刺激を受け合うなど、“つながり合う”姿が見られた。

(昨年度の反省をもとに・・・)

☆KJ法を用いたり、環境図を見たりしながらの話し合いなど、各担当が工夫して実施した。
☆少人数グループでの話し合いによって、発言しやすい雰囲気の中行うことができた。
☆普段は担当が発言する機会が多かったが、くじびきやじゃんけんて発表者を決めること担任以外の保育者の意見も聞くことができた。

研究方法②

幼児理解と保育に関する評価と改善 園内研修の実施

(方法)

- ・ビデオカンファレンス
- ・エピソード記録を用いて事例検討
- ・保育実践の振り返り

(幼児期までに育ててほしい10の姿を参考に)

各クラス担当が作成し、保育室前の廊下に掲示



↑新宮市教育研究会 委託研究発表会での様子



ドキュメンテーションの作成

☆保育者にとっても子どもにとっても、活動を振り返る機会になった。
☆保護者に園での活動や子どもの育ちを伝えるツールとして役立った。
☆子どもの言葉など、記録として残しやすい。

研究方法③ 短期と長期をつなぐ保育計画の改善

週案 1週案から2週案へ

以前はA4サイズの1週案を作成していたが、A3サイズの2週案に様式を変更した。一つ一つの遊びについて予想される展開や具体的な援助をしっかりと立案できるようになっ

た。しかし、2週間という長いスパンで見ることにより、後半には子どもの予想外の姿に対応が要され、修正しなければならないこともあった。今後も検討を続けていく必要がある。

5. おわりに

本園で継続して取り組んできた、様々な造形活動を通して遊びを充実させる、素材や教材研究、環境の構成の難しさを感じながらも、題材の選び方や材料の出し方、タイミングを工夫することで幼児が自分なりに表現することを楽しみ、主体的に活動する姿が見られ、素材や教材研究の大切さを改めて感じる事ができた。

また、職員全員で、大学教員と共に園内研修を行う中で、保育の様々な気づきや反省があり、保育者が悩みを出し合い、それを共有したりすることもできた。

更に、保育計画の書き方を見直したことで、個々の遊びの様子や展開などがより分かりやすくなった。その結果、遊びの発展・展開につながる援助や教材の工夫をしたことで、一人一人その子なりの表現を楽しめることになったと思う。

今後の課題として、4歳児なりに「もっとやりたい」と遊びを継続していくことができる素材研究、教材研究を引き続き行っていきたい。また、幼児が試行錯誤し、「自分でやりたい」と思える主体性が育っていけるよう、保育記録やドキュメンテーションの作成、定期的な園内研修を行い、PDCAサイクルを構築していきたい。

最後に、これからも幼児がどんなことに興味があるのか、どんなことに心が動いているのかしっかりと幼児に心を寄せて受け止め、保育を考えていく。そして、安心して十分に自己を発揮しながら、友達と、保育者と、”つながり合う”保育を目指していきたいと考える。また、園全体で幼児を支えていくという本園の強みを生かし、保育者同士のつながりも大切にしていきたい。

